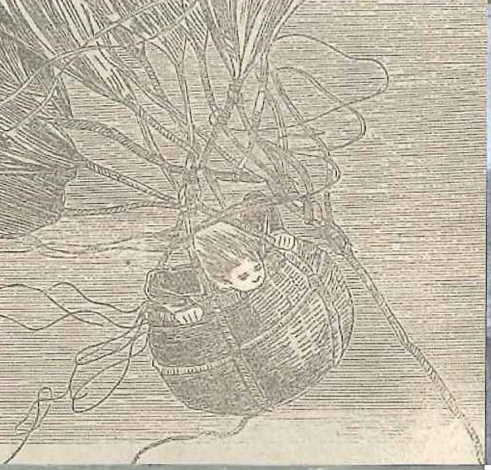
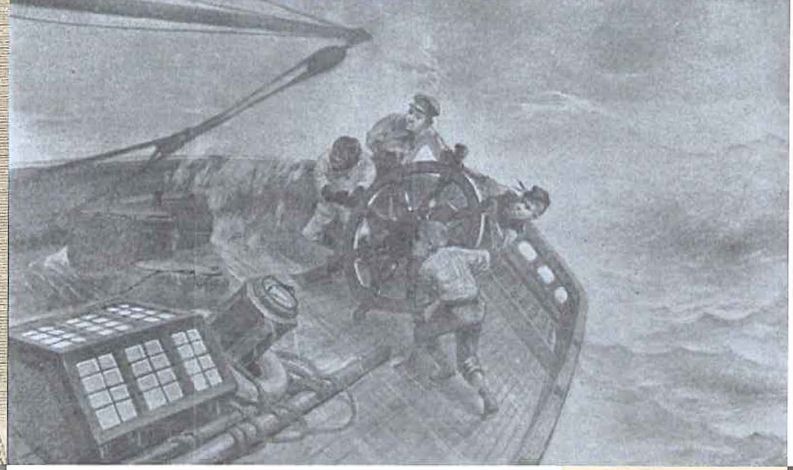


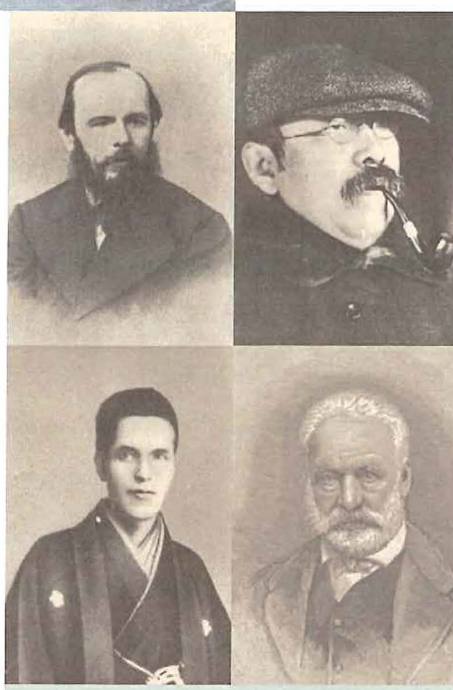


2020年
日本近代文学館
秋季特別展

日本をゆさぶった翻訳
——明治から現代まで

2020年10月3日(土)–12月19日(土)

編集　高橋修・武藤康史
主催　日本近代文学館

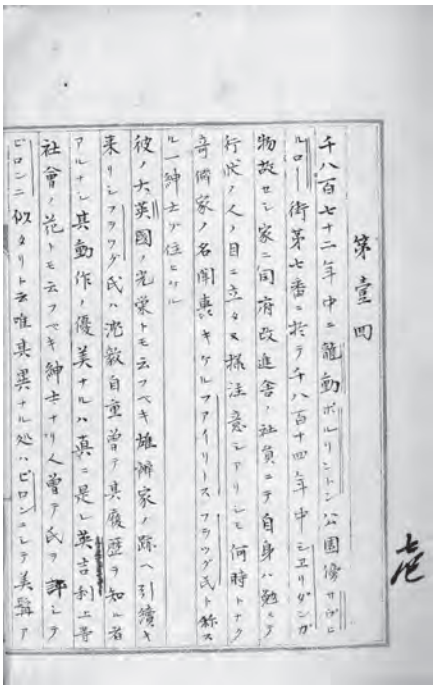


同時開催　川端康成記念室
川端康成の新聞小説

開館時間　9：30 ～ 16：30（入館は 16：00 まで）
休館日　日曜日・月曜日・10/22（木）・11/24（火）・11/26（木）
＊11/3（火・祝）、11/23（月・祝）は開館
会場　日本近代文学館　展示室
観覧料　一般300円
中学・高校生100円
アクセス　京王井の頭線「駒場東大前」駅 西口徒歩7分

公益財団法人　日本近代文学館
THE MUSEUM OF MODERN JAPANESE LITERATURE
Komaba, TOKYO
153-0041　東京都目黒区駒場 4-3-55
（駒場公園内）
tel 03-3468-4181
https://www.bungakukan.or.jp/

日本をゆさぶった翻訳
── 明治から現代まで



川島忠之助「新説 八十日間世界一周」訳稿

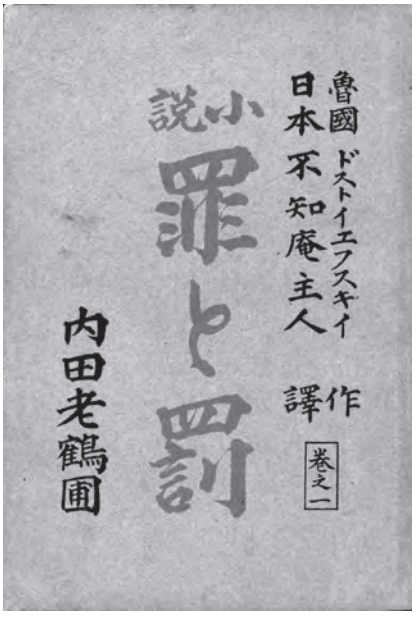
媒介（メディア）者としての翻訳──東西文化の懸け橋

本展編集・高橋 修

翻訳の文化形成に関わる力は大きい。それはいつの時代にも当てはまることだが、とくに未知の新しい他者である西洋的知見と遭遇した明治期には、われわれの想像を超える大きな役割を担った。物質文明から精神世界にいたるまで、翻訳行為は東西の言語共同体を「媒介」し、受けとめる側の発想の枠組みを組み替えるだけでなく、われわれが拠って立つシステムを映し出す鏡にもなっていたと思われる。

しかし、発信者のメッセージを受けとめるべきことばも概念も持ち合わせていなかった明治の翻訳者たちは、原文の意味するところそのままに再現すべくもなかった。洋の東西を跨ぐのは容易なことではなく、そこには彼らの時に大胆で時に繊細な悪戦苦闘の歴史が刻み込まれている。「翻訳」とは、閉じられた空間に攪（かく）乱と葛藤をもたらす媒介行為であり、問いと反問によって対話を巻き起こすパフォーマティブな実践ということができる。そうした翻訳営為を読み解くには、ことばの意味と運用にとどまらないメディアの情勢・ジャンルの記憶・政治的なイデオロギーに分け入らなければならない。

この展示では、明治から昭和に至る、翻訳をめぐる苦闘の歴史の一端を示している。



内田魯庵訳『罪と罰』巻１（内田老鶴圃 明治 25.11）

部門構成

第１部 冒険小説の時代
明治期に翻訳されたジュール・ヴェルヌの『新説八十日間世界一周』やダニエル・デフォーの『絶世奇談魯敏孫漂流記』などの冒険小説には西洋的な経済観や時間観念が表され、読者に大きな衝撃を与えました。『欧洲奇事花柳春話』『小公子』など、同時期の恋愛小説や家庭小説とあわせてご紹介します。

第２部 異境のしらべ
西欧の詩をいかに日本語に移し替えるか、さまざまな工夫や苦心の末に訳され、日本の近代詩に多大な影響を与えた作品を関連資料と共に展観します。

第３部 火の洗礼──ドストエフスキー『罪と罰』
ドストエフスキーの作品は、ロシアの批評家ベルジャーエフに「火の洗礼」と称されるほどのインパクトをもたらしました。二葉亭四迷から米川正夫まで、その魅力を伝えようとした訳者の系譜をご覧いただきます。

第４部 社会思想の翻訳──関東大震災前後
関東大震災をきっかけに出版を取り巻く状況も大きく変化しました。この時期に文学・思想に湧き上がった動きを当時刊行された社会思想の翻訳を通して考えます。

第５部　世界文学への一歩
川端康成や谷崎潤一郎、三島由紀夫らの作品が海外に紹介されていく軌跡を、エドワード・G・サイデンステッカーやドナルド・キーンとの書簡のやり取り、翻訳原稿などからご紹介します。

表面画像 左上から時計回りに
森田思軒訳『十五少年』挿絵（博文館 明治 44.10）／森田思軒訳『十五少年』挿絵（博文館 明治 29.12）／ドストエフスキー肖像（米川正夫訳『ドストエフスキイ全集 第五巻 罪と罰』（三笠書房 昭和 10.1）より）／内田魯庵肖像（斎藤昌三、柳田泉編『紙魚繁昌期』（書物展望社 昭和 7.2）より）／ユゴー肖像（森田思軒訳『探偵ユーベル』（民友社 明治 22.6）より）／森田思軒肖像／若松賤子訳『小公子』挿絵（女学雑誌社 明治 24.10）／井上勤訳『絶世奇談 魯敏孫漂流記』挿絵（博聞社 明治 16.10）／井上勤訳『通俗 八十日間世界一周』挿絵（自由閣 明治 24.11）／森田思軒訳『大叛魁』挿絵（「新小説」明治 22.5）

同時開催　川端康成の新聞小説

鎌倉長谷の自宅書斎で　昭和25-26年頃

「浅草紅団」「舞姫」「東京の人」「女であること」そして「古都」──。

これらの川端作品には、発表当時に新聞の連載小説であったという共通点があります。

当時の世相を作中に織り込むなどの手法は、新聞というメディアの特性が最大限に活かされたものと言えるでしょう。その一方で、作品によっては川端自身も思いがけない展開・分量になったなどのエピソードには、新聞小説という発表形式の影響が、色濃く反映されているとも考えられます。

様々な表情をみせる「川端康成の新聞小説」の魅力を、貴重な資料とともに探ります。

併設の川端康成記念室にて開催　特別展の入場料で同時にご観覧いただけます

交通のご案内

京王井の頭線「駒場東大前」駅下車
西口改札から徒歩７分 駒場公園内
※駐車場はございません。公共交通機関をご利用ください。